

一人でも多くの若者にチャンスを提供したい

個人会員 下茅 亮

●交流の中で芽生えたインドネシアへの貢献の思い

夕方、日が暮れ始めた時間帯のオフィスに電話の音が鳴り響く。電話に出ると、インドネシア人のマデが仕事中にケガをしたというものだった。担当者が状況を確認し、急いでオフィスを飛び出して行く。幾度となく観た光景だ。

技能実習生の受入れを支援する監理団体のオフィスでは、日本に入国したインドネシアの若者たちや受け入れて下さった企業からの連絡で、いつも落ち着くことがない。それを支えている熱い思いを持ったスタッフ達には感謝の言葉しかない。

2010年ごろ、IT企業グループに勤める私は、グループ内の海外現地法人に対するコンサルプロジェクトに参加していた。この当時のシンガポール現地法人の離職率は高く、東南アジア地域で現地法人を指導する際にパートナーとなるはずの現地責任者が2カ月ごとに代わり、頭を悩ませていた。

そんな中、8年ぶりにインドネシア法人を訪れると、街は驚くほど発展していたが、人々は変わらず優しい笑顔で私を迎え入れてくれた。他にもタイ、マレーシアの現地法人を担当していたが、他法人と比べて伸び代が多いインドネシア法人の担当者はいつも前向きで、悩んでいた私の方が励まされた。それと同時に8年前に抱いた思いがよみがえった。

さかのぼること8年前のその当時も、私は長期出張でインドネシアに滞在しており、一般的な大手企業のインドネシア駐在員と同じように、20代の若者にしては裕福な待遇を受けていた。

まだ若かったため、年の近い現地の若者たちと交流する機会も多く、その交流の中で貧困地域の光景を目の当たりにすることもあった。自分たちの生活との格差を感じずにはいられず、“笑顔を決やさず生きているこの人たちに何かできる事はないだろうか？”と、漠然と感じたものだった。



2002年当時、日系商社インドネシアオフィスにて。
後列右端が筆者

ある程度年を重ね、日本でもマネジメントを任せられる立場となって改めて周辺国とインドネシアを担当し、再びインドネシアと接する機会が多くなると、20代のころに感じた想いと同時に、“インドネ

シアの一般的な貧困地域に生まれたら一生チャンスを掴むことは難しいのではないだろうか？”という懸念が沸いた。私自身、周りの方々に助けられてチャンスを掴んできたので、それを何らかの形でインドネシアの人々にも提供したいと考えるようになっていた。

●運命を変えた突然の転職話

それからしばらくして、以前よりお世話になっている方から、新たな仕事のお誘いがあった。その方は、私がインドネシアの役に立ちたいと言っていたことを覚えていて下さり、「君にぴったりの仕事がある。ぜひその仕事を任せたい」という内容のものだった。“定年後に時間ができたらボランティアで何か役立つことが出来れば”とぼんやり考えている中、突然舞い込んできた転職話。私はその話に運命の様なものを感じたが、しばらく悩むこととなる。

その当時所属していた IT 企業では4月から私の部長昇進が計画されており、ポストに空きが出る部署へ異動したばかりだった。退職の意向を報告した際には、望めばどこの部署でも異動出来るが、それでも退職の意思は固いか？と問われた。社会貢献をしたいという意思を力説し、最終的には快く送り出していただいた。

今考えると、良い同僚や上司に恵まれ自らの承認欲求が満たされていたことが、社会貢献活動をしたという想いを後押ししてくれたのかもしれない。

初めての転職なので、家族からの反対も大きく、幼少期以来の手書きの手紙が母から送られて来た。自分がチャンスを掴んで成長できたように、インドネシアの人たちにもチャンスを提供したいという熱意だけで周囲をなんとか説得し、数カ月悩んだ末、新たな活動がスタートした。

●活動の中で得られる感動の数々

熱意にあふれ飛び込んだ世界ではあったが、当初、インドネシアの若者を受け入れてくださる企業が簡単には見つからず、順風満帆とは行かない。なかなか思うように若者たちを日本へ入国させることができず、悩んだ時期もあった。

技能実習を主事業とする協同組合は、営利を目的としない監理団体として、計画通り技能実習が行なわれているか定期的に確認、指導を行うことが仕事であるが、実習生の入国支援や入国後の実習生と企業のサポートも重要な仕事の一つである。

受け入れてくださる企業の思いと、日本で実習をして日本の働き方や技能を身につけたいと考えるインドネシアの若者の思い、両方の間に入り、両方を満足させられるように丁寧に対応することをスタッフと共に心がけるようにした。

その結果、受け入れてくださった企業からの紹介や周りの関係者の方々の紹介で、徐々にインドネシアから受け入れる実習生の数は増加。1000人以上の若者にチャンスを提供するまでに成長した。

インドネシアの若者たちは前向きで明るく、年上の方を敬う謙虚な若者が多いため、受け入れていた



組合が主催したフットサル大会に集まった実習生

だいた企業の方々からも好評を得た。また、組合員企業をはじめ、周りの企業の方々もインドネシアへの理解が深く、インドネシア側の送出国である日本語学校も含め、関わる方みんながインドネシアの若者を受入れる活動へ支援、協力いただけたことが助けとなった。

この活動を始めて良かったと感じる感動の場面が二つある。

一つ目は、面接に合格した時に涙を流して喜ぶ実習生候補者たちの姿だ。一生に一度しか発給されない技能実習 VISA を取得するため、日本語を学び、候補者選抜試験をクリアし、一生懸命挑んだ日本企業の現地面接を通過した実習生候補者の流す涙は、今の日本の採用ではなかなか見ることのできない貴重な光景だと思う。

二つ目は、3年間もしくは5年間の実習を終えて、インドネシアへ帰る実習生と受け入れ企業の方々が流す涙。3年間は短いようで長く、慣れない日本での生活では幾つもの課題を乗り越えて行く。受け入れ企業の方々のサポートがあって初めて無事実習を満了する事が出来るため、育てて下さった企業と頑張った実習生との間には自ずと絆が生まれる。空港での見送りの場面は、何度観ても感動の別れである。



帰国する実習生と見送る企業の方々

帰国する実習生の中には、単なる別れではなく、受け入れ企業のインドネシア進出を助けるスタッフとして活躍する実習生も存在する。また、実習生自らの良い経験を引き継ぎたいという思いから、日本へ旅立つ後輩を増やすため日本語学校を設立する者もいる。帰国した実習生の、このような活躍を知ること喜びの一つとなっている。

インドネシアの若者たちが日本に来て良かったと思えるように、そしてインドネシアへ帰国した後も日本での働き方と技術を活かして成長できるように、インドネシア愛あふれるスタッフと共に今後もサポートを続けて行きたい。

●おわりに

最後に、私やスタッフ、インドネシアの若者に新たなチャンスを提供して下さった方々、支援して下さった方々に感謝いたします。

これからも多くのインドネシアの若者にチャンスを提供し続けると共に、その若者たちが日本国内の人口が減少している地域でもお役に立てるよう考え活動して参ります。



下茅 亮（しもかや・りょう）

アジア技術交流協同組合代表理事

青山学院大学大学院国際マネジメント研究科（MBA）修了。2016年まで NEC グループ企業に勤務し主に事業企画を担当したのち、現職。